

# I 研究の概要

## 1. 研究主題について

「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」  
～思いや考えを伝え合う道徳や外国語・外国語活動の授業づくり～

### (1) 主題設定の理由

#### ア 児童の実態から

本校の児童は大切に育てられ、伸び伸びと育ち、大らかで、明るく人懐こく、気さくな人柄である。落ち着いた家庭環境で育てられた児童が多く、進んであいさつができ、学習にもまじめに取り組み、委員会活動や係活動などにも一生懸命に取り組んでいる。さらには、家族の愛情をたっぷり注がれて育てられた児童であり、自尊感情の高い者が多く、よく気がつき、周りの人に対してやさしく接することができる。

学校現場で「生きる力」を育むことをめざして、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を育むこと、指導にあたっては言語活動を充実させることや体験を重視させることに努めているところである。翻って本校の児童を見ると、素朴でひたむきに物事に取り組む反面、身の回りの環境に働きかける体験の不足や他者とのかかわりの希薄さから、コミュニケーションをうまく図れない、傷つきやすいなどの面をもっている。また、積極性に富み、自主的に行動する児童が多い反面、自分で物事を判断することを避けるなど、主体的に判断し、適切に行動することが苦手な児童もいる。

#### イ 今日的課題から

道徳が特設され60年を迎えた平成30年度から、道徳の時間は、新たな枠組みで教科化されることになった。道徳が教科化される背景には、「いじめ」等の諸問題の解決策をはじめ、道徳教育が今日の教育の中で重要な役割を担っていることはもちろん、道徳が義務教育である小中学校のみの授業でしっかりと授業を行い、自尊感情を高め、他者の思いや考えを認めるということがこれまで以上に求められているからである。これからの社会では社会性や規範意識、自尊感情や善悪の判断やその行動力等、よりよく生きていく豊かな心の育成が必要とされている。

そして、2020（平成32）年度より、中学年では外国語活動として、高学年では外国語科として教科化されることになる。これは、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力が、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が求められているからである。そこで、移行期である平成30年度、31年度は本格実施に向けて、カリキュラム等、準備を行う必要がある。グローバル化が進むこれからの社会において、多様な人々との豊かなかかわりが必要とされているのである。

### (2) これまでの研究過程

27年度 28年度 29年度  
研究主題「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」  
サブテーマ「思いや考えを伝え合う道徳の授業づくり」

10年間の国語の研究を経て培ってきた力を生かし、平成27年度は研究主題を「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」、サブテーマを「思いや考えを伝え合う道徳の授業づくり」とし道徳の時間を中心に研究を進めた。学校教育における道徳教育は道徳の時間を要として行われるものであるため、本校は道徳の時間に特化し、その在り方に重点を置いて研究を進めた。10年間の研究で大切にしてきた言語活動を授業づくりの中心に置き研究を進めてきた。一時間一時間の道徳の授業を大切にすることから始め、道徳的価値の自覚を深める授業のあり方について、資料の分析を丁寧に行い、授業研究を進めた。一時間の授業でねらうべき道徳的価値を見極め、その価値に迫るための授業展開を考え、授業に臨んできた。併せて道徳の年間指導計画が重要であることを再認識し、その見直し検討も行ってき

た。

27・28年度の2年間、明石市教育委員会の指定を受け、標記主題のもと、道徳の授業のあり方について研究を進めてきた。28年度には、平成28年度東播磨・北播磨地区小学校道徳教育研究大会、並びに、平成27・28年度明石市教育委員会指定道徳教育研究発表会を行った。

27年度、具体的に道徳の授業研究を進めていく中で、授業の原点である資料の分析の仕方やねらいと中心発問の関係性等、具体的な疑問や悩みが生まれてきた。そこで、28年度は、27年度と同様の研究主題「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」サブテーマ「思いや考えを伝え合う道徳の授業づくり」とした。

28年度は、27年度同様、道徳の授業づくりに特化して研究を進めてきたが、授業実践を積んでいく中で、「児童の日々の言動が変わったという実感を得られた」「授業を考えるにあたってより深く考えるようになった」などの成果を得ることができた。

その一方、①「道徳的価値のとらえ方」や「学習した道徳的価値を児童の経験と結びつけること」②「研究授業を重ねるほど、指導過程・指導方法・発問構成などの難しさの実感」などの課題もでてきた。また、別葉を作成することで、各教科・多領域との関係性や全教育活動を通して行う道徳教育の重要性を改めて実感した。

29年度は、28年度同様、研究の柱を「ねらいに迫るための発問であったか。」「言語活動を通して、児童が思いや考えを広げたり深めたりする工夫がなされていたか。」とし、研究を進めてきた。成果としては、教師側がねらいをしっかりと念頭に置いて授業づくりができたことや板書や資料提示の工夫ができたことが挙げられる。一方、研究が進んだことで見えてきた課題としては、「伝え合う」ことの不十分さや終末の工夫の仕方、そして、教科化に向けて、研究を行ってきた評価についての実際の記載についてなどである。

このように、本校では、道徳の授業に特化した研究を続けるとともにその土壌となる学級経営を大切にしてきた。本校の考える学級とは、一人一人が自立した学級であり、互いに高め合える学級である。そのことを目指して研究に取り組んできた。

### (3) 研究にあたって

本校は、道徳教育の研究に取り組み始めて本年度で4年目となる。『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』によると、道徳の目標は、道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることにある。道徳性とは、人間としての本来的なあり方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしいよさであり、道徳的諸価値が一人一人の内面において、統合されたものと示されている。道徳性を育成・涵養していくことは、道徳的価値を子どもたちに強要したり、道徳的実践力を求めたりする活動にはなく、「自己」という内面的な世界で、自分の生き方を考えるというものである。それは、多様な「人・もの・こと」との出会いから自己の生き方への問いが生まれ、生き方についての問題解決の過程を通して、生き方を見つめ直したり、生き方の実現へ向けての実践を行ったりするもので、実生活で生きてはたらく力の育成が必要であると考え。豊かなかかわりの中で自分の考え方や行動をふり返り、これから心の持ち方や行動のあり方について見据える力を養い、多様な他者との良好な関係を築き、目的を共有しながら協働する力をつけ、自己の行為を価値判断に基づいて決定するための力を育成することを目標とする。児童は、多様な「人・もの・こと」、とりわけ「人」と相互に関わり合いながら生活しているが、自己の生き方や他者の生き方を日頃から意識して生活していることはほとんどない。したがって、自己の生き方を含む多様な生き方への関心をもつことが大切になり、そのことが児童にとって大切な学びの原動力となると考える。そして、自己と他者とのふれ合いをより広げていくことが児童にとって、より深い学びにつながっていくのである。

そこで、本年度は研究主題を「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」、サブテーマを「思いや考えを伝え合う道徳や外国語・外国語活動の授業づくり」として、道徳の授業づくりを中心にしながら、外国語・外国語活動の授業づくりについても研究を推進していくこととした。

「豊かなかかわり」とは、

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 新しい自分との出会い</li><li>② 子ども同士の学び合い</li><li>③ 地域社会の多様な人々とのふれ合い</li><li>④ 自然や動植物等とのふれ合い</li></ol> |
|--|

など、自分自身を含め、多様な「人・もの・こと」とのかかわり合いととらえる。外国語・外国語活動の研究により、人々とのふれ合いをさらに広げていくことができると考えられる。

「よりよい生き方」とは、

「未来に希望を抱きつつ、困難な状況に遭遇してもたくましく生き抜こうとする生き方」

とする。

研究を進めるにあたって、具体的に、特別の教科である道徳（以下「道徳科」）については、資料分析を毎時間行いながら、一時間一時間を大切に、道徳の授業をする。27年度は、授業実践において「守破離」の考え方を取り入れ、まず、型を「守る」という視点から道徳的価値の自覚を深めるための授業の研究を行った。児童が道徳的価値の自覚を深めるための授業展開を考え、一時間一時間を大切に授業してきた。また、言語活動を学級の児童の実態に応じて取り入れながら授業を行ってきた。授業実践を積んでいくと、道徳の授業の原点である資料の分析の仕方やねらいと中心発問の関係性等、より具体的な疑問や悩みが生まれてきた。また、「資料からはなれ、自分に返す」という道徳の授業の特性についてもさらに研究が必要であると感じるようになった。28年度は「守破離」の考え方の「守る」から「破る」へと研究を進めていった。例えば、中心発問を取り入れる場所を変えたりや価値項目を最初から提示するなど型を「破る」という授業に取り組んできた。29年度は、一時間一時間を大切にするとともに、型を「破る」という授業にさらに取り組んでいき、それを検証してきたが、まだまだ課題が残っている。

外国語・外国語活動については、まず、言語活動を通して、コミュニケーションの素地や基礎となる資質・能力を育成するための授業をするところから研究を始める。そこで、本年度も研究主題を「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子どもの育成」、サブテーマを「思いや考えを伝え合う道徳や外国語・外国語活動の授業づくり」とし、道徳の研究を中心に、外国語・外国語活動についても研究を進めることとした。

本年度、道徳については「守破離」の考え方の「破る」をさらに深めながら研究を進めていく。「破る」については、昨年度取り組んだが十分だとは言いがたい。そこで、毎時間、授業後に取り入れた言語活動が適切であったかなどの検証を行っていく。また、児童同士の思いや考えをお互いに交流し、自分の考えを深めていくことができる「伝え合う活動」についての実践をより具体的に積んでいきたい。そのことが、より道徳的価値の自覚を深めることにつながると考え、自分の心のもち方や行動のあり方について見据える力、多様な他者との良好な関係を築き、目的を共有しながら協働する力、自己の行為を価値判断に基づいて決定するための力の育成へとつながると考える。

本校では、道徳については研究の柱を

「ねらいに迫るための発問であったか。」

「言語活動を通して、児童が思いや考えを広げたり深めたりする工夫がなされていたか。」

とし、授業を深めていく。発問と言語活動を柱に授業づくりをし、「豊かなかかわりを通して、共によりよい生き方を求める子」の育成を目指していく。

本校における「ねらいに迫る」とは、

児童一人一人が道徳の授業を通してねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをもつことができるようになること

と考える。

外国語・外国語活動については

「言語活動を通して、コミュニケーションの素地や基礎となる資質・能力を育成するための授業づくりの工夫ができていたか。」

とし、授業づくりについて考えていく。

そして、「伝え合う授業」とは、

まず、発達段階に応じて、「伝える」「聞く」から始める。

自分の考えをもち、その自分の思いや考えを自分の言葉で伝えることで、道徳的価値をさらに深めたり、友だちや教師の考えを聞くことで新しい考えに出合ったりすることができる。お互いに「伝える」「聞く」ことで「伝え合い」、自分の思いや考えを再構築することができる。

授業とする。そのために、考える視点や話し合う視点を明確にして、児童に伝えるための発問の工夫が必要であるとする。

以上のように、本校の研究は、道徳科と外国語・外国語活動について研究を行う。

『小学校指導要領 特別の教科 道徳編』に示されている通り、学校における道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである。また、小学校指導要領の各教科・領域の第4章指導計画の作成と内容の取扱いにも示されている通り、道徳科と各教科・領域との関連性は深い。道徳科を大切にすることで、他教科の授業も大切に考えることにつながり、そうすることが、児童一人一人を大切にすることにつながっていくと考える。

自分の思いや考えを自分の言葉で伝えられる子に、そして、それを受け止め、さらには、自分の意見を再構築し、また伝え合うことのできる集団を育成することを目指していきたい。相手を受容的な態度で受け止められるという思いやりの心を育成し、そのような個・関係を作っていくことが「共によりよい生き方を求める子どもの育成」につながっていくものとする。仲間と生活する中で自己有用感を高めることや児童一人一人が学ぶことの楽しさや成就感を味わいながら、自ら学び、自ら考える力を培う学習活動を推進していく。その基盤となり得るのが学級であり、土台であるとする。そこで、本校では、学級経営と授業づくり（道徳科と外国語・外国語活動）を両輪に据えて研究を進めていく。年度当初に学級担任は学級経営案を作成し、児童の実態から1年後の目指す児童像を見据え、学級経営に取り組んでいくこととした。